

可視性の転覆

——アルゼンチンにおける出自と政治

石田智恵

0. 「ハポネス」の失踪

1976年8月22日の晩、26歳のカチヨはブエノスアイレスの目抜き通りのひとつ、コリエンテス大通りのいつものカフェに出かけた。そしてそのまま二度と帰ってこなかった。足取りも行方も生死さえはっきりしないまま、すでに40年以上が経過した。

カチヨだけでなく数万人ともみられる人々——そのほとんどが30歳代までの若者だった——が、同じ時期に同じように姿を消し、連絡を絶った。アルゼンチンで1970年代に「行方不明者／失踪者 *desaparecidos*」になるということは、独裁体制下で弾圧の対象となった、すなわち国家権力によって消されたということの意味する。カチヨも、社会秩序を乱す「転覆分子 *subversivo*」「過激派 *extremista*」と呼ばれ、軍の作戦部隊に拉致され、秘密拘留所で監禁、拷問、殺害されたと思しき「失踪者」のリストに名を連ねるひとりである。

カチヨは、本名をカツヤ・ヒガ（比嘉勝也）という。3歳のとき、姉と弟とともに両親に連れられて沖縄（現在の北中城村）からブエノスアイレスに移住した、いわゆる準二世である。生まれた土地とは違う土地に移り住んだという意味では間違いなく移民であった¹⁾が、ものごころついた頃からブエノスアイレスで生活し、他のアルゼンチン人と同じように公教育を受けスペイン語を日常言語とした点で、彼の親と同じ意味で移民だとは言えない。ましてや本人が移民として、あるいは「日本人」として自己肯定していたか疑わしい。というのも、かれは当時のアルゼンチン社会にあって他のどんなことよりも「日本的でない」振る舞い、すなわち抵抗の政治活動に文字通り身を投じたからだ。

一方で、だからといってかれが「移民」、「日本人」という出自を忘れて生きていられたというわけではない。アルゼンチン一般社会においてカチヨはシンプルに「日本人^{ハポネス}」だったのだ。この「ハポネス」とは何よりも外見による、「人種」の分類である。アルゼンチンのとくにブエノスアイレス都心部にあつて、日本人移民（の子孫）の身体、なかでも「顔」は、黙っていてもその出自を雄弁に物語り、しばしば当人の意識以上の意味を周りの者に与えてしまう。ひとりひとりの顔が人種＝国民の「指標」として社会的に機能するのが、西洋中心主義に基づいて建設されたアルゼンチンという国民社会であり、そこでは「国民と人種の概念の歴史的相互規定関係」（Balibar 1991:53）は20世紀を通じて疑問に付されることはなかった。そのことを誰よりも知っていたのが、隠しようのない東洋人の顔をもったアルゼンチン人たちだった（Ko 2014; 石田 2013; 2017）。

そのなかでも、「ニセイ／二世の時代」とも呼ばれる1960-70年代に「若者」であった人々は、各々の人生のなかで「二世」独自の問題に直面した。それはひとことで言うなら、国民／人種

的同一性の二重性と二重否定の只中に置かれた生——アルゼンチン人であり日本人である、アルゼンチン人であってアルゼンチン人でない、日本人であって日本人でない、アルゼンチン人でも日本人でもない、のいずれもが正しい理解であり得るような生——を条件づけられ、その条件から生じる様々な困難、わずらわしさ、不条理に常に応答し続けなければならないという問題である²⁾ (比嘉 2003; 石田 2011)。そのような「二世」——生得的移民と言ってもいい——としての条件に、「テロリスト国家」の名で呼ばれるアルゼンチン史上最も残忍な権力との対峙という状況が重なっていた。

1970年代のこの状況下で、わかっているだけでも17人の「ハポネス」がアルゼンチン社会から姿を消した。カチヨ以外の16人は全員アルゼンチン生まれで、日本もしくは(米国施政権下の)沖縄出身の父親を持つ。カチヨのほかに2人日本国籍を持つ者がいるが、アルゼンチン生まれで二重国籍者である。17人のうち4人が「混血」、うち3人が西洋系アルゼンチン人の母親と日本人の父を持ち、残りの1人は、父方の姓が「カルドーソ」、母方の姓が「ヒガ」である(それ以外に両親についての情報は現時点で得られていない)。17人のうち13人が沖縄に出自を持つが、沖縄と本土(内地・ヤマト)の両方に出自を持つ者はいない。沖縄系のこの高い割合はアルゼンチンの日系コミュニティ全体の沖縄系の割合とほぼ同じである。

「失踪」のターゲットになったと考えられる活動、政治信条、立場、職業、属していた政治組織、ミリタシヤ *militancia*³⁾ はそれぞれに異なっているが、(広義の)日本人の親を持っていたこと、当時の政府の圧制に服従を示さなかったこと、別の政府、別の社会が必要と考えその実現のために活動していたことは共通している⁴⁾。

市民の一部を文字通り「失踪させる／消し去る *desaparecer*⁵⁾」ことにより残りの市民を恐怖のうちに支配するという国家暴力とそれが社会にもたらした今も未解決のさまざまな問題にどう向き合うかという課題に対し、アルゼンチン社会では当時から現在まで、「記憶・真実・正義」を共通のスローガンとしてさまざまな応答が試みられてきた。なかでも「五月広場の母たち」がよく知られているように、しばしば市民運動が国政や国際世論を動かしてきただけでなく、過去をめぐる理解の図式は、常に激しく対立する複数の視点、議論の間を揺れながらいくつも提示され書き換えられてきた。しかしそうした強制失踪者の理解の枠組みや語りのなかに、カチヨたちのような「日本人(日系)失踪者 *desaparecidos japoneses/ nikkei*」がどう位置づけられているのかは必ずしも明らかではない。ミリタシヤや「失踪者」は「アルゼンチン人」の問題であるというとき、その「アルゼンチン人」に「ハポネス」は含まれるだろうか。日系失踪者たちの「記憶・真実・正義」は、排除されることはないまでも、当然のものとして共に訴えられてきたのだろうか。40年前の「ハポネス」の、「ニセイ」たちの振る舞いについての理解や応答は、アルゼンチンでも日本でも今もって十分になされてきたとは言えない。

「失踪者」の議論に「移民」の論点を持ち込むのは見当違いという意見もあるかもしれない。「アルゼンチン版ジェノサイドは出自の差別をしなかった」のだから⁶⁾。また、「アルゼンチンには日本人差別はない」とは、日系人⁷⁾と西洋系アルゼンチン人に共通する「常識」でもある(cf. 石田 2017)。しかし、まさにそうした「問題の不在」言説そのものの問題性が等閑視されてきたのではないか。犠牲者の国籍が多様であったこと、「移民国アルゼンチンだからゆえに、多国にわたる国際人権問題と化した」(佐伯 1982) ことだけが「失踪者」をめぐる出自の問題ではな

い⁸⁾。1990年代の「多文化化」以前のアルゼンチンでは移民（エスニシティ・人種）の議論は政治の分野で一種のタブーとされていたという指摘（Grimson 2006: 73）を無視しないのであれば、政治において出自の主題が避けられてきたことそのもの問題性に向き合うべきだろう。本稿ではこうした関心に立ち、「ハボネス」と政治をめぐる状況をいまいちど振り返り、かれらの政治闘争にとっての移民という出自＝顔の意味を、またかれらの「回復」を試みる家族たちがいかにそのことを問うてきたのかを考えたい。

1. 国民とその他者の形象

1990年代以降のブエノスアイレスにおける非ヨーロッパ系住民の可視化の帰結として、近年、アルゼンチン人の概念をめぐる「ヨーロッパ人神話」はさまざまな角度から批判されている（Caggiano 2005; Kim 2010; Ko 2014）。しかしながら、過去の国家暴力による強制失踪の問題とほぼ同義としての人権問題の分野においては、人種／エスニシティに関心が向けられることは極めてまれである。前述したように、移民の出自を政治的論点とすることは避けられていた。しかし国民の記憶における「移民問題」や「人種差別」の不在は、それらの問題が現実には不在であることを意味しない。政治的問題と「国民」の問題は、切り離すことのできない二つの主題であり、特にマイノリティ集団にとってはより深く複雑に交錯しているだろう。

アルゼンチン国民社会に形成されてきた集团的差異の様式（Segato 1998; Grimson 2000）は排他的な二項対立のかたちをとる傾向にある。一方には、文明化－近代化した、ブエノスアイレスを中心とする上・中流階級の西洋系アルゼンチン人の形象があり、他方には、西洋文明的でない伝統的な、内陸の、下層労働者階級のラテンアメリカの混血の形象がある⁹⁾。後者はしばしば侮蔑的に「ビジェロ（貧民）」の「ネグロ」「カベシータ・ネグラ」として言及される。「ネグロ／ラ」は「黒」を意味するが、この文脈ではアフリカ出自の「黒人」ではなく、西洋系白人と対照的な黒い髪や褐色の肌すなわち先住民・メスティーソを想起させつつ、まずもって「ビジェロ」すなわち貧困層であることに言及する蔑称である¹⁰⁾。こうして人種差別を階級差別として覆い隠す「クリオージョ・レイシズム racismo criollo¹¹⁾」（Guber 1999: 114）の枠組みのなかでは、日本人や東洋人一般はナショナルな意味を与えられるカテゴリーではなかった。日本人移民は西洋移民と同じ程度に早い時期、20世紀初頭には到着してはいたが、数の少なさもあり、日本人コミュニティの社会的現実是不可視にとどまった。それは国民を覆う「ラテン的同質性」（AUN 1990）の只中であって際立つ身体の可視性¹²⁾とは対照的であった。

一方で日本人移民は、「アルゼンチン人」の形象と明確な対照をなす独自の差異の語彙で語られる。「日本人 japonés」という語が示すものは極めて限定され、「真面目」「おとなしい」「働き者」「従順」「閉鎖的」「ノンポリ」「犯罪と無縁」といった一連の語彙が繰り返し用いられる。それ以外のタイプの差異（沖縄出身であるか本土出身であるか、移民か現地生まれの子孫か、日本語話者かスペイン語話者か、など）は日系コミュニティ la colectividad¹³⁾ japonesa の外では意味を失うのである。「ハボネス」が同時に「アルヘンティーノ」であり得るということは国民的想像の範疇の外にあり、日本人は常に国としての日本、あるいは遠い東洋のどこかの地域、地球の反対側に結びつけられる。「ふつうのアルゼンチン人」と違っている限りにおいて、日本人は

アルゼンチン社会に独自の位置を与えられてきたのである (Ko 2014; 2016, 石田 2017)。

他方で、日系コミュニティは国家と個人の間、アルゼンチンと日本の両者からの二重の、競合する呼びかけの仲介者としての位置に見出される (Gavirati e Ishida 2017)。日本国家からの「日本人」の呼びかけは、大使館や日本人会などの組織を通じて移民やその子孫にも届けられていた。この意味で、「日本人」のステレオタイプはコミュニティの内側でも再生産されてきた。アルゼンチン社会に存在してきた「ハポネス」をめぐる肯定的なイメージの維持と世代を超えた継承・保存は、コミュニティの規範として重視されてきたし、それはアルゼンチンと日本の両国家のイデオロギーに合うことであった (石田 2013a)。

2. 独裁体制と移民コミュニティ

1970年代までにすでに確立されていた「ハポネス」のステレオタイプ、とりわけ「従順」「おとなしい」「目立たない」といったイメージは、独裁政府にとって好都合なモデル・マイノリティの性格を日系コミュニティに与えた。こうした性格は、1976年から83年まで政権を握った軍事評議会政府がテレビやラジオなどのメディアだけでなく義務教育の現場も介して¹⁴⁾普及に努めた「良いアルゼンチン人」の姿に重なる、「転覆分子」「過激派」から最も遠い形象を示していたのだ。加えて日本政府は当時、アルゼンチンの製鉄会社の工場建設への投資をめぐって陸軍将軍ビデラ大統領政権と交渉中でもあった (そのためビデラ大統領は1979年10月に日本を国賓として訪れている)¹⁵⁾。こうした状況下で、日本人と名乗りまたそうみなされることは、たとえば第二次大戦期の米国やペルーでの状況とは正反対の価値を持った (少なくとも危険を招くものではなかった)。この点で、各地方の日本人会をはじめとしたコミュニティの諸団体は、アルゼンチン中の他の多くの組織やセクターと同じく、独裁体制に翼賛的であった。もとより政治への関与を避ける傾向にあったと言われる日系コミュニティだが、「(政治に)口を出すな」とは「当局に反抗するな」という意味であり、この時代にはそれまでより厳格な規範として共有された (石田 2015)。

日本に出自を持ち、かつ反政府的・反資本主義的思想を实践する人々、言い換えれば「転覆分子」とみなされる恐れがあった人々¹⁶⁾は、国家とコミュニティの二重の抑圧にさらされることになった。日本に出自をもつミリタンのなかには、家族の強い反対にあった者もあり、そうでなくとも、家族を危険にさらさないため、あるいは家庭内の衝突を避けるために、自身の活動を隠していなければならなかった。衝突に至らずとも、ほとんどの場合、家族とくに親の理解は得られなかった。かれらの活動は「ゲリラ」「テロリスト」と同一視されるもので、それは移民一世である親たちにとって、「日本人」全体の評判を地に落とすものだったからだ。身内から「共産主義者」を出したと周囲に知られることは「恥 *vergüenza*」だったのである¹⁷⁾。

「ハポネス」でありかつ「政治的」であること (その結果「失踪者」になること) はしたがって、権威主義的な国家とコミュニティの二重の呼びかけに対する反乱であり、ナショナル・イデオロギーにとって転覆的であった。ある人物のこぼれ話を借りれば、かれらは「二重に革命的 *doblemente revolucionarios*」¹⁸⁾な存在だったと言える。「ハポネス」として期待される行動を拒否し、さらに模範的なアルゼンチン人の形象をも転覆するものだったからだ。しかし「二重」

というのは、二つの異なる社会、二つの体制があることを意味するわけではない。「二重に革命的」とはむしろ、「ハボネス」と「アルヘンティーノ」、「ネグロ」と「アルヘンティーノ」、「転覆分子」と「アルヘンティーノ」といった二項対立（その前項は広義の、つまり第二級のアルゼンチン人であり、後項は狭義の、つまり正統なアルゼンチン人を示す）に基づくアイデンティティの枠組みへの対抗的な振る舞いを示しているだろう。言い換えれば、国民カテゴリーを通じて特定の集団を政治空間から排除する分類の政治そのものの変革が目指されていたのだ。「国民」の境界の攪乱。その意味でかれらは確かに転覆的であった。

3. パフォーマティブな「顔」

自分自身の信念に従って社会変革のために行動する者、あるいはミリタントであることは、「国民再編過程 *Proceso de Reorganización Nacional*」¹⁹⁾を肅々と実現する国家にとってわずらわしいもの、トラブルとして現れる。「転覆分子」とは軍事評議会政府にとってトラブルである者に与えられた名であったとも言える²⁰⁾。いっぽうで、どこにいてもまず「日本人」と名指され常に「よそ者」という属性を意識させられ、西洋系白人アルゼンチン人が享受するような「ふつうのアルゼンチン人」の社会生活へのアクセスが制限されているという意味で、日本人の顔を持つこと自体がアルゼンチン社会にあっては「トラブル」であった（ある）。

「アイデンティティの攪乱 *subversion*」をサブタイトルに含む『ジェンダー・トラブル』の導入部分で、ジュディス・バトラーはこう記している。

欲望をもつ男の主体にとってトラブルがスキャンダルとなるのは、女という「対象」がどうしたわけかこちらのまなざしを見返したり、視線を逆転させたり、男の立場や権威に歯向かったりし、それによって女という「対象」が男の領域に突然侵入するとき、つまり予期しない行為体エイジェンシーとなるときである。男の主体がじつは女という《他者》に根本的に依存していることによって、男の自律性が幻想でしかないことが、突然にあばかれる。（バトラー 1999：8）。

バトラーがジェンダー・カテゴリーを構築してきた言説を植民地主義、人種主義と連動したものとして批判し、アイデンティティと主体の問題として論じていることをふまえるなら、上記の引用文のような議論における「男」を「国民（白人／マジョリティ）」に、「女」を「外国人（非白人／マイノリティ）」に置き換えて読むことはかなりの程度まで可能であるように思われる。仮にそうだとすれば、上の引用文の後に提示された「ジェンダーの階層秩序や強制的異性愛を支えているジェンダー・カテゴリーにトラブルを起こすのに、最良の方法は何なのか」（バトラー 1999：8-9）という問いを、本稿の文脈に移植してみることは、「転覆分子」と呼ばれることをある意味で自ら選んだ「失踪者」の行為の理解に近づくことにならないだろうか。

バトラー自身は先の問いに対し、同書第3章「攪乱的な身体行為」で具体的に回答を示している。そこでバトラーは、異装という行為にみられるパフォーマティブな身体の使用が、身体という「本質」とその外見への「表出」という自然化された概念や、異性愛の首尾一貫性とい

う規制的な虚構を破壊するものであると述べている。異装は、「セックスとジェンダーの統一的な因果関係を自然で必然だと規定している文化配置」に逆らって、両者の関係が偶発的であると示すのである。こうして、わたしたちは「身体性という意味をもつ偶発的な三つの次元——つまり解剖学的なセックスと、ジェンダー・アイデンティティと、ジェンダー・パフォーマンス——のなかに存在している」(バトラー 1999: 242) ことが明かされる。

バトラーの回答に学ぶならば、わたしたちはここで、人種的マイノリティとして暴力的な政治の場に身を晒す者たちの、生物学的な表現型(日常的に理解される「人種」の概念、本稿で「顔」と呼んできたもの)と、国民的アイデンティティと、ナショナルな政治的パフォーマンスの三つの結びつきが偶発的でありしたがって構築されるものであることを理解する必要があるだろう。バトラーにとっての「パフォーマンス」が、「異装」というまさに身体を見せる行為であったことにならって、わたしたちが読み取るべき政治的行為とは、政治信条に則った活動それ自体のみではなく、日本人として読まれる「顔」をアルゼンチン人のそれとして見せること、と言い換えられる。それこそ、人種と国民の「統一的な因果関係を自然で必然だと規定している文化配置」——ミリタンテ=アルゼンチン人は白人である——に逆らうことにはかならない。日本人の顔を持ちながらミリタンテであるということはそれ自体が、「アルゼンチン社会を変革し得る者=アルゼンチン人=西洋系白人」という政治-人種-国民的カテゴリーを攪乱すること、国民内部の階層秩序や人種的偏見を支えている体制にトラブルを起こすスキャンダラスな振る舞いでもあるのである。

しかし、体系的にかつ秘匿的にジェノサイドが進行する社会にあって、そうしたスキャンダラスな生もまた殲滅の対象となった。冒頭に取り上げたカチョの「失踪」直前の足取りをもう少し詳しくたどりながら、その生への接近を試みよう。

1976年8月22日、その日カチョは家を出たあと、コリエンテス大通りのカフェバーで待ち合わせをしていた友人に会っている²¹⁾。そこからの帰り際、友人はカチョに、いつもの帰り道とは別のルートで遠回りをし、少し時間をおいてからカチョの家で改めて落ち合おうと提案した。この日彼はカチョの家に泊まる予定だったようだが、最短距離を一緒に帰るのは危険だと考えたのだ。それはその時の街の状況とかれらの立場を考えれば当然の提案だった。8月22日は「トレレウの虐殺」(1972年)²²⁾を想起すべき日付であり、1973年以降ゲリラ組織や左派系政治組織は毎年この日に犠牲者の追悼と軍部への批判を込めた活動を行っていた。そして1976年3月24日のクーデタで軍事評議会が国家権力を掌握してから最初のトレレウの日、反体制活動家を発見し連行すべく、街の至るところで軍や警察が検問や包囲網を展開していたのだ。

そもそも、家を出るときにカチョは弟のヨウジから外出を思いとどまるよう進言されていた。ヨウジはその日の街に漂う「雰囲気重さ」を感じ取り、兄の身を案じた。だが兄は「大丈夫、何も起こらないよ」と言って出かけて行った²³⁾。

ただでさえ他人と見間違えられ難い身体を持ち²⁴⁾、人よりも簡単に見つけられるカチョが、通常よりも徹底した検問が敷かれるなか、夜の遅い時間帯に目抜き通りを進むことが自殺行為であることは、友人には明白であると思われた。カチョ自身も、その危険を理解していなかったとは考えにくい。ブエノスアイレス大学文学部の学生運動の指導的存在であり、軍部の追跡の対象となっていた彼は、76年の時点ですでに地下に潜らねばならないほど「失踪」の危険

を感じ、ゆえに細心の注意を払って身を隠す術を心得ていた。それでもカチヨは、友人の提案に反して「コリエンテス大通りから帰る」ことを主張し、そこで友人と別れた。

そこからいくらかも離れていない場所でカチヨがパトカーに乗せられて連れて行かれるのを見たという証言が、数日後に匿名の人物からの電話で家族に伝えられた。だがその人物も身元を明かさず、真偽は定かでない。そのほかに有効な情報を家族はこれまで得ていない。ただし、秘密拘留所——拉致した人々を拘留、拷問、殺害するための拠点として用いられたさまざまな軍や警察の施設・個人宅の総称——のひとつであり、最大の犠牲者を生んだことで知られる「エスマ ESMA (Escuela de Mecánica de la Armada, 海軍工科学校)」に拘留され後に解放された生存者のなかに、エスマでカチヨを見かけたと言明する人物がいるという²⁵⁾。ここに収容された人の多くは「死の飛行」と呼ばれる（薬品を投与し朦朧状態にした上でヘリコプターで上空に運びそこからラプラタ河に突き落とす）方法 (Verbitsky 1995) で殺害されたとみられる。

4. 「他なる生」を生きてみせること

カチヨだけでなく、「日系失踪者」たちは多くの場合、まさにその「顔」ゆえに、他のアルゼンチン人よりもテロリスト国家による追跡を逃れるのが困難だった²⁶⁾。そしてそのことは、ミリタネタるかれら自身がおそらく誰よりも理解していただろう。だがそれはかれらがミリタネシアを、あるいはその他の「転覆活動」とみなされる恐れのある活動を離れる理由にはならなかった。それぞれに違った考えや多くの異なる理由があっただろう。その思考のなかに、こんな考えも浮かんだのではないだろうか。もしもアルゼンチン国家テロリズムの犠牲者に「ハポネス」が一人も含まれないとしたら、それはわたしたちの政治的な沈黙の結果ではないのか。「ハポネスのミリタネタなど存在しない」「アルヘンティーノの政治にハポネスは関係ない」という構築された言説を繰り返してしまうことにはならないか、と。

在亜日本人会現会長（2017年3月時点）のアルベルト・オナハによれば、彼の家族とカチヨの家族は出身村が同じ²⁷⁾で、父親同士が仲の良い友人だったので、幼いころは村人会や家族どうしの付き合いなどでよくカチヨやヨウジに会って遊んでいたという²⁸⁾。しかし、同じくカチヨたち比嘉家とは家族ぐるみの付き合いがあり、同じく準二世と呼び得る世代に含まれる別の人物によれば、1970年代にはすでに「カチヨは完全に日系社会から離れていた」²⁹⁾。ミリタネシアに多くの時間を割くようになっていたことがうかがえる。

当時大学生であれば学生運動に関わることは珍しくなかったが、カチヨのそれは「関わる」というよりも主導する立場であったようだ。1976年8月という、クーデター後の早い段階で「失踪」の対象になっていることもその証左である。後述する「日系社会失踪者家族会」のメンバーであるエルサ・オオシロはカチヨの4歳年下で、彼と同じブエノスアイレス大学文学部に入学している。彼女にとってカチヨは「チェ・ゲバラのようなあこがれの存在だった」。学生運動を率いる年長者たちのなかでもカチヨの演説は特に人を惹きつけていたことを彼女は覚えている。その時もやはり聞かれるのは「見ろよあのハポネス、すごい演説だ」という声だった³⁰⁾。多くの人に声を聞かせようとするとき、自身の顔は、注意をひくには都合がよかったのかもしれない。だとすれば「ハポ」としての顔は彼にとって、出自や国民的アイデンティティの「表出」であ

るよりも、ミリタンシアにおけるパフォーマンスの一部でもあり得ただろう。そしてそれは、彼の自由の実践であったはずだ。

パフォーマンスな身体と政治に関して、廣瀬純は、フーコーの読解を介しイスラーム国によるテロ事件を次のように理解する。

「他者への関係」としての権力のただなかに「自己への関係」としての自由がつねにすでに存在しているという真理——この真理をおのれの身体を通じて物理的に文字通り実現してみせること。たとえば、監視カメラの張り巡らされたロンドンの街でそれでもなお自爆攻撃を実行してみせることは、「主権＝法」システムの次元で「犯罪」あるいはそれ以上のもの（「テロ」）として表象される以前にまず、権力関係の次元における自由の存在を物理的に表出する行為としてある。自由の存在をそれとして生きてみせ可視化することはそのようにつねに「スキャンダラスな」行為であり、だからこそフーコーは「勇気」を語るのだ。イスラーム国に日本から参加しようとした若者の事例もまた、何よりもまず、彼が実際に生きてみせようとしたその「スキャンダラスな生」において人々の関心を引く。

それを実際におのれの身体によって生きてみせることでスキャンダラスな「他なる生」をそのまっただき可視性において人々に突きつける——フーコーはそのモデルをキュニコス派（公衆の面前で「犬として」生きた哲学者たち）に見出しているが、「真理への勇気」はこの点においてこそすでに「政治」なのだ。人々の眼前で「他なる生」を生きてみせることは「他人への働きかけ」（権力）だが、それは人々を一人ひとり「自己への働きかけ」（自由）へと導こうとする働きかけなのだから。権力関係から我々は誰ひとりとして逃れ得ないという条件それ自体がここでは自由の実現に転用される。そして、この転用を可能にするのは「自己への関係」としての自由のその存在が特定の人に限った真理ではなく、すべての人にとって真理であるという事実、イスラーム国に参加しにいく若者たちにとってのみの真理ではなく、我々みなにとっての真理であるという事実、勇気さえあれば我々はだれでも自由を実現できるという事実だ（廣瀬 2015：224-225、強調は石田）。

「失踪」の日になぜカチョが弟や友人の忠告にもかかわらず大通りを進んだのかは疑問のままだ。危険を冒してもどうしても譲れない目的があったとして、それが何であったのかはわからない。だがおそらくそれは、軍の手に落ちる可能性を引き受けた上での賭けだったのだろう。賭けるに足る目的がなんであったとしても、そのために身をさらしたカチョの行為は、トラブルとしての「ハボネスのミリタンテ」の身体を弾圧者の前に差し出すというスキャンダラスな行為、「攪乱する身体行為」であっただろう。それは同時に、廣瀬の言う「自己への関係」としての自由の実現でもあった。

「日系失踪者」のひとり、アメリカ＝アナ・ヒガ（注26参照）は、ミリタンテ仲間のあいだでは「ラ・ハポ」の通称で知られていた。「失踪」させられる恐れがあった当時のミリタンテの多くは、居所をつきとめられないように本名を極力隠し、仲間うちでも偽名——戦闘名 *nombre de guerra*——を使って生活、活動していた。アメリカ＝アナも「ノルマ」など複数の戦闘名を使っていたことが元同志の生存者の証言からわかっている。しかしそれとは別に、おそらくより類

繁に用いられていた³¹⁾「ラ・ハポ la japo」, すなわち定冠詞付きの「日本人女性 la japonesa」を省略した, 文脈が違えば固有名詞の代わりにはなり得ないような呼称の存在は, 彼女の周囲に東洋人女性がほかにいなかったことをよく示している。同じように, ルイス=エステバン・マツヤマは「ハポネス」, カルロス=オラシオ・グシケンとフリオ=エドゥアルド・グシケン, オスカル・オオシロ, そしてリカルド・ダクジャクは「ハポ」, さらにファン=アルベルト・カルドーソ・ヒガは「チーノ (中国人)」のあだ名で呼ばれていたことが確認されている³²⁾。

このことは, かれらがミリタンシアのなかで「ハポネス」として特別な扱いや差別を受けていたことを意味するわけではない。ミリタンシアに限らず, 見知らぬ人からの一方的な「ハポ」の名指しとは異なり, 日系人の多くは友人・仲間のあいだでは「ただのアルゼンチン」とみなされ扱われており, また「日系失踪者」たちについてもそうであったと証言されている。おそらくそうした環境で日本人の相貌を持つ者を「ハポ」とあだ名することは, やせた体格の人物に「フラコ flaco」(細身であるという意味の形容詞) というあだ名で呼ぶのとそう変わらない感覚だったのだろう。

しかし, 「日系失踪者」のうち少なくとも数人は, 「よりアルゼンチン人に近づこうとしていた」, 「(親と同じ) 日本人と呼ばれることを否定していた」, あるいは日本の出自とアルゼンチンという生活の場を両立し得るものとは捉えていなかった(石田 2015: 73-75)。このことを考慮したとき, 「ハポ」という親しみを込めた呼称は, 彼らをより一層強くミリタンシアに駆り立てたとは考えられないだろうか。別の時代, 別の場所の二世たちを想起してもいい。たとえば太平洋戦争下, アメリカ合衆国市民である日本人移民「二世」たちが自身の証明として命のやりとりの場に身を差し出す必要があったのは, 法的地位よりも「顔」という人種的指標が, 「敵性国民」として疑われる根拠になったからだった。「日系失踪者」たちの「二世」としての状況を同じように考慮するなら, どんなに日本人移民のコミュニティから離れても「日本人の顔」とともにかれらについてまわる「ハポ」の名が, 「日本人の顔など自分の生を何も規定しない」ことを身をもって示そうと, より強くかれらに思わせた瞬間はなかっただろうか。そうだとすれば, ミリタンテ-失踪者としてのかれらの生は, 「ハポ」として軍の追跡を受け, 「ハポネスの失踪者」として記録されることまでを含めて, 顔に配分された生からは逃れ得ないという条件自体を自由の実現に転用する, スキャンダラスな生の実演でもあったと言えるだろう。

5. 消された生の回復

民主主義体制が回復されたのち, 「プロセソ」軍政が行なった暴力, とくに「失踪者」たちに行なったことを明らかにし責任を追及するための膨大な作業が実行に移されてきた³³⁾。政治的であることの持つ社会的な意味や, この主題に関する立場の取り方の大勢も次第に変わっていった (da Silva Catela 2001; Vezzetti 2002; Crenzel 2008)。元弾圧者に対する免責が打ち出される一方で, それに対する抵抗と告発の声も拡大し続け, 2003年以降の左派政権下では80年代の免責法が無効化されるに至った。こうした展開のなかで, 軍事独裁体制について大きな声で語ることや定型的なフレーズ——「(失踪したのは) 何か理由があるのだろうか por algo será」, 「何かやったからだろう algo habrán hecho」, 「軍もやりすぎたがゲリラも悪い」(双方悪魔説) ——を離れ

て議論すること、旧軍部を批判し告発することは、政治的に正しいとみなされるようにさえなつたといえる。アルゼンチンは「二度と繰り返すな」をスローガンとする「人権先進国」(Sikkink 2008)に変容したとさえ言われる。

「人権」を共通の価値とする闘いの中心にはほぼ常に「記憶・真実・正義」のスローガンが置かれてきたが、記憶も真実も正義も特定の立場から語り得るものであり、どのような語りにも必ずそこからこぼれ落ちる別の語りがある。「記憶」と政治に関する著作のある社会学者エリザベス・ジェリンは「マイノリティと政治闘争」と題した論考のなかでこのことに注意を喚起している。

スローガンというものにはどこか人をだますところがある。「忘却に抗する記憶」や「沈黙に抗する記憶」は、それが実際には対抗的な複数の異なる記憶のなかのひとつの異論であることを隠している。ほんとうは「記憶に対する記憶」なのに (Jelin 2004: 12)。

こうして私たちは、過去の表象をめぐるさまざまな闘争が、権力と正統性と承認をめぐる闘争に集中していることに気づく。この種の闘争は、さまざまに異なるアクターによる、過去についてのひとつの(かれらの)語りを「公式化」あるいは「制度化」するものでもある。(Jelin 2004: 17)

ジェリンはこうして、あまりに日常化して「記憶すべきもの」とみなされない過去、すでにマジョリティの忘却のかなたに葬られた記憶の存在に注意を喚起する。70年代の国家暴力は記憶すべき過去であり、その被害者＝アルゼンチン人に東洋人が含まれることは記憶すべき過去ではないのか？

「日系社会失踪者家族会 Familiares de Desaparecidos de la Colectividad Japonensa」(以後、FDCJ)もまた、「五月広場の母たち」と同じく、テロリズムの被害者の家族であることを共通項として記憶・真実・正義を求める活動を行なう数あるグループのひとつである。FDCJのメンバーのなかに日本語話者はおらず、そのほとんどが「日本人」ではなく「アルゼンチン人」であると名乗る、二世もしくはそれ以降の世代の「日系人 nikkei」である。かれらは、「日系失踪者」たち本人が決して「^{ハポネス}日本人」だと名乗らなかつたことを知っており、団体の名称として「ハポネス」の文字を掲げることは正しくないのではないかと長年議論してきた。その議論に決着はついておらず、それでもここまで「日系社会」という限定句を「失踪者」の前に置いたグループ名を名乗り、「desaparecidos japoneses 日本人失踪者／日系失踪者」と書かれ、かれらひとりひとりの顔写真を掲げた横断幕を今も掲げてデモを行なっている。

このことについて、出自-人種コミュニティを脱した「失踪者」を再び出自の枠に引き戻す行為だと解釈する立場があるかもしれない。しかしわたしたちは、生物学的身体とアイデンティティとパフォーマンスの結びつきは偶発的なものにすぎないというバトラーの指摘を思い起こそう。FDCJが掲げる「ハポネス」もまた、アイデンティティや身体の「自然な」表出ではなく、パフォーマンス的なそれであると理解できるはずだ。では一体それは何のパフォーマンスなのか。

「日系失踪者」について知らしめるための展示会などの活動をするなかで、親族たちはしばしば、「ハポネスの失踪者がいる」ことを初めて知って驚きを隠さないアルゼンチン人に出会う。なかには、「日本で何をやったの?」「どうして日本人が拉致されたの?」と問い返す人もいる（筆者にも、自身の研究テーマを説明した相手からこうした反応が返された経験がある）。こうした人々にとってはいまもって「ハポネス」と「失踪者」は奇妙な組み合わせであり、スキャンダラスな響きを持ち続けている。あいかわらず「失踪者」と「人権問題」は優れて「アルゼンチンの」な主題であり、「ハポネス」はそこには無関係なのである。ここに、批判的行為としての「ハポネス」の名乗りの意味が見出される。すなわち親族たちは、こうした無意識的に「公式化」されたナショナルな記憶の言説を再生産する人々の前に、「日系失踪者」の文字と「ハポネス」の顔を突き付け、「失踪者＝アルゼンチン人＝白人」のカテゴリーを攪乱するのである。それは、「失踪」させられた人々が実現した自由の再演でもあり、そうすることが、国家テロリズムを生き延びたかれらが引き受ける応答可能性＝責任（崎山 2001, 特に pp. 99-132）のあり方であり、おそらく同時に、「失踪」させられた「ハポネス」の生の価値を回復すること *reivindicar* でもあるだろう。

追記： 本論は、2012年から2017年にかけてブエノスアイレスで実施した総計約10か月間の調査に基づいている。調査中、インタビューに応じてくれた方々、そのほかさまざまな形で協力、援助してくれた方々、とくにFDCJのメンバーに深く感謝したい。また本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号25884081, 25243008, および14J08713）の受給を受けて実施されたものであることをここに明記する。

注

- 1) アルゼンチン生まれでないためアルゼンチン国籍を持っていなかった（弟のヨウジは後に帰化しアルゼンチン国籍を取得したが、カチョはしていない）。つまり法的にも間違いなくカチョは移民であった。
- 2) この論点については、立命館大学国際言語文化研究所連続講座「越境する民——変動する世界」第1回「マイノリティを語る——イタリアとフランスのいま」（2016年10月7日）にコメンテーターとして参加する機会を与えられた際、講師の栗原俊秀氏および石川清子氏の著作・翻訳作品およびお二人の講演と質疑応答を通じて示唆を受けた。とりわけ、境界における二つの領域の「相互干渉と相互浸透」という視点（石川 1996: 2011）、さらに石川氏が著作を翻訳されているモロッコ出身のフランス語作家タハール・ベン・ジェルーンが示す「境界線」の二重性、二重の所属と排除（ベン・ジェルーン 1996）に関する洞察は、本稿の構想の出発点となった。
- 3) ミリタンシアとは「ミリタンテ *militante*」がおこなう実践、その条件を差し、ミリタンテとは、自身の思想・信念・目標の実現のため何らかの組織、党派団体の活動に参加し寄与する人を差す（動詞は *militar*）。日本語には「(政治)運動家」「活動家」「アクティビスト」などと訳することができるが、政党政治に限らず「宗教活動家 *militante religioso*」「地域社会活動家 *militante barrial*」などとさまざまな種類の活動に用いられ、共通項は語源のとおり「闘う」「闘争」にある。その意味で「闘士」という訳もあり得るが、本稿では「ミリタンテ」「ミリタンシア」という音写を用いる。
- 4) 1970年代アルゼンチン軍事政権下の「日系失踪者」と出自の問題に関しては、別の場所でも取り上げて考察した。本稿の多くの記述はその論文（石田 2015）に基づいており、とくに事実関係についてはそちらに詳述したのでここでは繰り返さない。

- 5) 本来スペイン語の動詞 *desaparecer* は自動詞「消える」だが、国家暴力としての強制失踪の文脈では、軍事政権が提示した「(彼らが) 消えた」という自動詞の論理を否定し、「(暴力によって) 消されたのだ」という事実の告発の意味を込めて、他動詞として使用されることも多い。
- 6) 「日系失踪者」を主題としたドキュメンタリー映画「沈黙は破られた *Silencio Roto*」(パプロ・モジャーノ監督、カリナ・グラシアエーノ原案、2015年)を紹介した新聞記事や同作品の予告編 (<https://vimeo.com/112433280>) などに共有される見方。
- 7) 本稿では便宜上、日本人移民とその子孫を「日系人」と総称するが、その指示対象や定義は一定ではありえない。こうした呼称が常に問題含みなものであることについては博士論文(石田 2013a)で論じた。
- 8) ユダヤ人であることを理由とした厳しい拷問や残虐な行為はその一例である (CONADEP 2003=1984: 75)。
- 9) アルゼンチンの歴史を条件づける排他的二元論という論点についてはアメストイ (Ameztoy 1998) を参照されたい。
- 10) アルゼンチンの人種主義、階級差別と政治的対立の関係についてはグベル (Guber 1999) が詳しい。
- 11) プエノスアイレスにおいて「クリオージョ」とは、無徴の「アルゼンチン人」すなわち西洋系白人のアルゼンチン人を含む。
- 12) 日本人の「傑出した身体」は「歴史的にラテンの典型になじまないものであった」ため、常に日本人をそれと見分ける「区別符号 *el diacrítico*」として機能している (AUN 1990: 22)。
- 13) 本稿ではこの語を、アルゼンチンのスペイン語において担う意味のままに、つまり「共同体」一般ではなく、移民に出自をもつコミュニティを指して用いる。
- 14) 『教育環境における国家転覆活動 (我々の敵を知ろう)』と題されたマニュアル (指導要領) が教育機関に配布され、反体制活動の抑止と生徒たちの監視が学校でも求められた (Britez y Denza 2012: 89-91)。
- 15) 外務省外交史料館史料、「アルゼンチン・ソミサ製鉄所拡張計画」(分類番号 SE-1-2-3、文書ファイル管理番号 2014-5859)。
- 16) その内実は多様で、共産主義、社会主義、アナキズム、マルクス主義、ペロニズムなどの思想に基づく政治組織に属するかそのシンパである者、または工員として組合組織に関わる者、その他さまざまな専門職 (ジャーナリスト、弁護士、会計士) や学生の立場から労働者の権利を訴える者や社会的不平等を批判する者もいた。
- 17) 家族が「失踪者」であることを「恥」として隠す「日本人」に対する批判の語りは、後述する「日系社会失踪者家族会」のメンバーやその協力者に共通してみられる。たとえば同家族会に参加するノルマ・ナカムラ (弟のホルヘが「失踪者」) は、「父の世代の日本人移民は、お上には絶対服従だった。だから、軍政に連れ去られた若者たちのことも、“身内の恥”と受け取っていたと思う」と述べている (Elias 2010)。このような日本人の親たちの反応は、「家族会」の活動にとっても障害となった。
- 18) 「日系失踪者」のひとり、アメリカ=アナ・ヒガ (後述) と同じ組織のミリタントだったマリア・デル・カルメン・カストロへの聞き取り (2015年2月9日、プエノスアイレス市)。
- 19) 1976年3月24日のクーデターによって樹立された軍事評議会政府が掲げた国策の名称。ここから同軍事政権は「プロセソ」とも呼ばれる。
- 20) 注14で言及した、軍政当時の教育省発行の文書の一部を引用すれば、「転覆活動 *subversión* とは、権力を掌握しそれによって異なる価値観に基づく新たな様式を課すことを目的として、ある人民の生活様式と道徳的規準の改変または破壊を目指す、狡猾なまたは暴力的な秘密のまたは公開のあらゆる行動を指す」(『教育環境における転覆活動 (我々の敵を知ろう)』アルゼンチン文化教育省、1977年、p.16.)
- 21) 以降のカチョの「失踪」の日のエピソードは、カチョと最後に会った友人の証言を聞き取ったりカルド・ポヒオ (人権省関連機関職員、注25参照) への聞き取り (2017年3月1日、プエノスアイレス市) に基づき再構成したものである。
- 22) バタゴニア地方ラウソンの刑務所からの脱走を企てた左派ゲリラ闘士のうち逃亡に失敗した19名が

- 捕えられ、トレレウ市近郊の海軍基地において銃殺された事件（うち3名が生き残ったが、のちの軍政下で暗殺されている）。
- 23) 2015年1月7日、ヨウジ・ヒガへの聞き取り（ブエノスアイレス市）。
- 24) 当時、ひげと長髪は左翼的な若者の記号であった。「あの頃ひげを伸ばしているニホンジン *nihonjin* はひとりも見なかった」と仲村実範（後述）は回想するが、「家族会」が使用している顔写真ではカチョは口ひげを生やしている。
- 25) リカルド・ポヒオらが独自の調査で得た情報。ポヒオは法人権省の管轄である「記憶の空間」のひとつ「旧海軍工科学校 Ex ESMA」の職員。
- 26) もう一つ別の例を挙げておく。武装革命闘争を展開した組織のなかでもペロニズム左派の「モンテネロス *Montoneros*」とともに最も大きな影響力と組織力を持った「労働者革命党（Partido Revolucionario de Trabajadores, PRT）」（軍事部門として「人民革命軍 *Ejército Revolucionario del Pueblo, ERP*」を持つ）のミリタunteであったアメリカ＝アナ・ヒガは、ブエノスアイレス南部郊外の同志夫婦の家にかくまわれていることを軍につきとめられ、その夫婦とともに拉致された（1977年5月16日）。強制失踪の作戦部隊はアメリカ＝アナの居所を探し歩いていて、両手の指で両目を外側に引っばって、「ハボネス」もしくは「チーノ（中国人・東洋人）」の顔を示す典型的なしぐさをしてみせることで、どんな人物を探しているのかを近隣住民に伝えて情報を得ていたという（Elias 2010）。
- 27) カチョは北中城村出身と記録されているが、北中城村は戦後に中城村から分離した新しい行政区分であり、戦前はカチョたちもアルベルト・オナハの家族とともに中城村人会に属していた。
- 28) 2014年3月13日、ブエノスアイレス市での聞き取り。
- 29) 2014年3月3日、仲村実範への聞き取り（ブエノスアイレス市）。中村は1952年のとき5歳で家族と沖縄からアルゼンチンに移住している。
- 30) 2014年3月20日、エルサ・オオシロへの聞き取り（ブエノスアイレス市）。
- 31) マリア・デル・カルメン・カストロ（注18参照）は「私たち（同志）は彼女をラ・ハポと呼んでいた（当時は本名を知らなかった）」と話し、筆者とのインタビューのあいだも「ラ・ハポ」と言及していた。
- 32) 人権局がとりまとめている国家テロリズムの被害者名簿（*Secretaría de Derechos Humanos de la Nación, "Registro unificado de víctimas del terrorismo de Estado argentino: Víctimas de desaparición forzada y asesinato en hechos ocurridos entre 1966 y 1983", ANEXO I*）には、「失踪者」の調査のための基本的情報が掲載されており、そのなかにはあだ名や偽名も含まれる。本名を隠して活動していたミリタunteが多く、組織の仲間や友人の証言を得るには実際に用いられていたあだ名が有益な手がかりになることが多いためである。
- 33) その代表的な例として、「全国失踪者委員会」による強制失踪作戦の調査とその報告書『二度と繰り返すな *Nunca más*』（CONADEP 2003=1984）があるが、その調査方法や視点をめぐって批判が提示され、論争が生じたこと（Crenzel 2008）も追記しておく。

参考文献

- Ameztoy, María Virginia. (1998). "Autoritarismo, sociedad y Estado en la Argentina," en Inéz Izaguirre coord./ comp., *Violencia social y derechos humanos*. Buenos Aires: Eudeba, pp.228-244.
- AUN (Asociación Universitaria Nikkei). (1990). *La otra inmigración*. Buenos Aires: AUN.
- Balibar, Etienne. (1991). "Is There a 'Neo-Racism'?", "Racism and Nationalism", in Etienne Balibar and Immanuel Wallerstein, *Race, Nation, Class: Ambiguous Identities*. Verso, London, pp.17-28, 37-67.
- Britez, Rafael y Nestor Denza. (2012). *Los pibes del Santa: Represión estudiantil en Florencio Varela (1976-1983)*. Segunda edición. Bernal: Universidad Nacional de Quilmes. (= 2007)
- Caggiano, Sergio. (2005). *Lo que no entra en el crisol: Inmigración boliviana, comunicación intercultural y*

- procesos identitarios*, Buenos Aires: Prometeo.
- CONADEP (Comisión Nacional sobre Desaparición de Personas). 2003 *Nunca Más*, 8ª edición. Buenos Aires: Eudeba (=1984, 1ª edición)
- Crenzel, Emilio. (2008). *La hisotia política del Nunca Más*, Buenos Aires: Siglo XXI.
- da Silva Catela, Ludmila (2001), *No habrá flores en la tumba del pasado: La experiencia de reconstrucción del mundo de los familiares de desaparecidos*. La Plata: Ediciones al Margen.
- Elias, Diego Ardouin, (2010), "Rediscovering The 'Disappeared'", *Dispatches International* 1 (3) : 8-23. ("Desaparecidos de la Colectividad Japonesa durante la dictadura militar del 76-83", http://argentina.indymedia.org/news/2010/11/762655.php?hc_location=ufi. 2017年3月21日最終アクセス)
- Gavirati, Pablo e Chie Ishida, (2017). "Interpelación o Autonomía: El caso de la identidad nikkei en la comunidad argentino - japonesa." *Alteridades* 27 (53) . Universidad Autónoma Metropolitana, Ciudad de México. pp.59-71.
- Grimson, Alejandro. (2000). *Interculturalidad y comunicación*, Grupo editorial Norma.
- . (2006). "Nuevas xenofobias, nuevas políticas étnicas en la Argentina," Alejandro Grimson y Elizabeth Jelin comps., *Migraciones regionales hacia la Argentina: Diferencia, desigualdad y derechos*. Buenos Aires: Prometeo. pp.69-97.
- Guber, Rosana. (1999). "'El Cabecita Negra' o las categorías de la investigación etnográfica en la Argentina". *Revista de Investigaciones Folclóricas* 14: 108-120. Buenos Aires.
- Hilb, Claudia. (2010). *Usos del pasado: Qué hacemos hoy con los setenta*. Buenos Aires: Siglo XXI
- Jelin, Elizabeth. (2004). "Minorías y luchas políticas." *Oficios Terrestres*. año X, número 15/16, Facultad de Periodismo y Comunicación Social. Universidad Nacional de La Plata, pp.10-21.
- Kim, Junyoung Verónica. (2010). "Desarticulando el "mito blanco": Inmigración coreana en Buenos Aires e imaginarios nacionales" *Revista de Crítica Literaria Latinoamericana* Año XXXVI, núm 71. Lima-Boston, pp. 169-193.
- Ko, Chisu Teresa. (2014). "From Whiteness to Diversity: Crossing the Racial Threshold in Bicentennial Argentina", *Ethnic and Racial Studies* 37 (14) : 2529-2546.
- . (2016) "Toward Asian Argentine Studies," *Latin American Research Review*, 51 (4) : 271-289.
- Segato, Rita Laura. (1998). *Alteridades históricas/ Identidades políticas: Una crítica a las certezas del pluralismo global*. Serie Antropología 234. Departamento de Antropología, Instituto de Ciências Sociais. Universidade de Brasília.
- Sikkink, Kathryn. (2008) From Pariah State to Global Protagonist: Argentina and the Struggle for International Human Rights. *Latin American Politics and Society* 50 (1) : 1-29.
- Verbitsky, Horacio. (1995). *El vuelo*. Buenos Aires: Planeta.
- Vezetti, Hugo. (2002). *Pasado y presente: guerra, dictadura y sociedad en la Argentina*. Buenos Aires: Siglo XXI.
- 石川清子 (1996) 「声と声の間で——タハール・ベン・ジェルーン小論」『ユリイカ』28 (12) : 60-64. 青土社
- 石田智恵 (2011) 「所属をわずらう移民」『生存学』4号, 生活書院, pp. 125-128
- (2013a) 「〈日系人〉の生成と動態——集団カテゴリーと移民コミュニティの歴史人類学」, 立命館大学大学院先端総合学術研究科博士論文
- (2013b) 「集団の名, 集団の顔——アルゼンチンの社会変動と「ニッケイ」」『体制の歴史——時代の線を引き直す』天田城介・角崎洋平・櫻井悟史編, 洛北出版, pp.431-482.
- (2015) 「軍政下アルゼンチンの移民コミュニティと「日系失踪者」の政治参加」『コンタクト・ゾーン』7:56-82, 京都大学大学院人間・環境学研究科文化人類学研究室 (<http://hdl.handle.net/2433/209809>).

可視性の転覆（石田）

- (2017) 「やわらかな人種主義:アルゼンチンにおける「ハボネス」の経験から」『文化人類学研究』
18 (掲載決定), 早稲田文化人類学会
- 佐伯泰英 (1982) 「家族たちの叫び:アルゼンチン県人失踪事件を追う 5」『琉球新報』1982年2月15
日夕刊。
- 崎山政毅 (2001) 『サバルタンと歴史』 青土社
- バトラー, ジュディス (1999) 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 竹
村和子訳, 青土社
- 比嘉マルセーロ (2003) 「「私はアルゼンチン人です」——20世紀のアルゼンチンにおける日本人移民の
下位世代のこぼれとアイデンティティ志向の形成をめぐる一考察」『移民研究年報』9, 日本移民学会,
57-92.
- 廣瀬純 (2015) 「イスラーム国と「真理への勇気」——ミシェル・フーコー／キュニコス派」『暴力階級と
は何か:情勢下の政治哲学 2011-2015』 航思社, pp.219-225
- ベン・ジェルーン, タハール (1996) 「境界線からのアンガジュマン (インタビュー)」『ユリイカ』28 (12)
:50-59. 青土社

